



国臨協関信

HPアドレス <http://kanshinshibu.org>

平成27年10月

事務局 〒162-8655 東京都新宿区戸山 1-21-1
国立国際医療研究センター病院中央検査部門内
発行者 峰岸正明
編集委員 後藤信之・山崎直樹・椎名将昭
印刷所 東洋印刷株式会社
☎ 03-3352-7443

第43回国臨協関信支部学会報告

国臨協関信支部 事務局長 小 沼 進 吉

平成27年9月12日(土) 国立国際医療研究センターに於いて第43回国臨協関信支部学会が開催されました。今年は異常気象で多雨、台風と開催日の天候に不安はありましたが好天に恵まれ先ずは安堵しました。また、350名を超える参加者となり、一段と気を引き締めた一日となりました。本学会テーマは「臨床検査の広がり求めて～知・技・人をつなぐ～」であり、学術的な交流を深め先輩から後輩へそして会員相互の知識・技術の向上に寄与する場としたい趣旨が込められています。ゆえにルーチンアドバイザー委員の方々にご協力を得た分科会を目玉にした学会といたしました。検体検査部門として新人技師はもちろん経験豊富な技師でも不安な気持ちを抱える「緊急検査」をテーマに実践を基にした解説をしていただきました。また、生理検査部門として「超音波検査ハンズオン」、循環器領域では3Dプローブを用いた心機能評価等、腹部領域では各臓器を描

出する走査法、体位変換などのテクニックについて解説していただきました。参加された皆様、不安な気持ちが少しでも解消されたか。今後の実践に是非いかしてください。

一般演題は37演題あり、今回新たに設けた新人セッション、セッション毎のベスト口演賞も試みました。また、学会セレモニーでは学術奨励賞、学会特別賞の表彰そして地区会コーナーでは毎年審査員を悩ます中、千葉地区会が優秀賞に輝きました。受賞された皆様おめでとうございます。学会閉会後の意見交換会ではOB会の皆様にもご参加いただき盛況裏に会員相互の親睦を深めることができました。

最後に学会運営にあたりご協力いただきました実務委員の皆様、国立国際医療研究センターの皆様そして会員の皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



第43回国臨協関信支部学会 学会風景



地区会コーナー優秀賞を受賞して



NHO千葉東病院
齊 藤 友 永

平成27年9月12日（土）、国立国際医療研究センター国際医療協力局において第43回国臨協関信支部学会が開催されました。地区会コーナーにおいて、本地区会が「地区会コーナー優秀賞」を受賞する事が出来ました。前回までの本地区会のポスターは会員6施設のメンバーと6施設それぞれの特徴を千葉県色全開で紹介していたために掲載内容が多く構成もある程度決まったものになっていました。そこで今回は思い切って掲載内容をシンプルにしてはどうかとの提案があり新棟での診療が始まる国府台病院の紹介をメインに、あとは本地区会の絆の深さ、活発な活動を掲載することにしました。構図は映画のパンフレットをイメージし、話題の進撃の巨人と人気漫画、ワンピースの名場面をパロディー化したものを作成しました。この中で国府台病院の特徴については進撃の巨人の名台詞をもじった【駆逐してやる！肝炎&精神疾患】のフレーズに込め、千葉地区会の仲の良さ、絆の深さをワンピースの名場面で表

現しました。その際、各施設の技師長に左手を掲げた後ろ姿の写真を撮影していただきポスターに使用しました。活動報告も紙面の3割程を割いて掲載し本地区会の活動の活発さが見て頂けたと思います。学会当日に貼り出されたポスターは各地区会が趣向を凝らし、工夫された素晴らしいものばかりでした。その中で幸運にも優秀賞を頂く事ができ大変光栄であると共に嬉しく思っています。この賞を励みに千葉地区会がよりいっそう楽しく、絆の強い地区会になるよう努力していきたいと思ひます。

最後に、学会開催にご尽力頂いた国臨協関信支部役員の皆様はじめ関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。



第43回国臨協関信支部学会学術奨励賞及び 学会特別賞選考委員会報告



NHO東長野病院
山 崎 剛

8月7日 国立国際医療研究センターにて国臨協本部、関信支部、各地区会から今回は東京地区会と埼玉地区会、そして技師長協議会の代表者5名が集まり抄録による一次選考を、そして9月12日学会当日、①発表時間配分、②スライドの状況、③発表態度、④質疑に対する対応等を評価する二次選考を行い、各賞を決定しました。

今学会では、新人セッション枠が設けられ、学会発表への登竜門として参加しやすい環境が用意されていました。その中には非常にしっかりと書かれた抄録もあり、新人賞も選考してはどうかという意見も出されましたが、事前周知が不徹底であったり、表彰規程の見直し等にも関わってきますので、今回は見送ることと致しました。

特別賞には「骨髓像トレーニング理論の提唱」を発表された、国立国際医療研究センター病院の大城雄介先生を選出しました。

骨髓細胞の判読は個人の力量や、経験が判読レベルに大きく関与しますが、施設のレベルを維持すべく、骨髓像トレーニング理論を提唱されました。細胞分類

の目あわせだけでなく、各ステップ終了後にも解説を行ったり、誤判定された細胞について指導者とディスカッションを実施するなど、きめ細かな指導の様子が伺えます。また、自施設のみならず、他の施設の技師を対象にした、受け入れ体制の構築も期待でき、骨髓像判読に対する、臨床検査技師のレベルアップにも期待が持てます。

学術奨励賞には、「小児横紋筋肉腫におけるNOS1抗体の有用性」を発表された、国立成育医療研究センターの高橋千明先生を選出しました。

小児の横紋筋肉腫の組織型である胎児型横紋筋肉腫と胞巣型横紋筋肉腫を、NOS1抗体を用いた免疫組織化学染色により鑑別する有用性について発表されていて、施設特性を鑑みても学術的に非常に優れた発表だと思われます。また、鑑別の有用性だけでなく、胞巣型横紋筋肉腫に対する遺伝子異常の推定にも触れられており、NOS1抗体について更なる考察が期待出来るものと思われます。

今後も研鑽を積んで頂き、関信支部学会に留まらず、国病学会や、病理学会などに発表して頂けることを期待しています。

受賞されました先生方、また施設の皆様、おめでとうございました。

学術奨励賞を受賞して



国立成育医療研究センター
高 橋 千 明

第43回国臨協関信支部学会において学術奨励賞という栄誉ある賞を頂けたこと、大変有り難く思っています。

昨年4月に国立成育医療研究センター病理診断部に配属され2

年目となります。この間、大学時代卒業研究で身に付けた分子病理学の世界を更に活かせるようにと、入職間もなく当センター研究所にて3か月間分子病理学研修をさせていただきました。この分野の基礎を学ぶことで、奥深さに触れ、感興を得る事が出来ました。また、この経験が今回の発表である「小児横紋筋肉腫におけるNOS1抗体の有用性」へつなげていくことができたと思います。

本発表は、一見するとNOS1抗体という一酸化窒素合成酵素の1つである抗体を用いた免疫組織化学染色による基礎的検討と思われがちですが、免疫組織化学染色という簡便な手法を用いて、横紋筋肉腫の診断に不可欠なPAX3-FOXO1やPAX7-FOXO1といったキメラ遺伝子の存在を推定することで、早期診断・早期治療の一助として非常に有用であるという結果を得ることができました。

今回の発表では、忙しい中研修の機会を与えてくださった病理診断部の方々、過去のデータ解析結果を踏まえた先生方のご指導ご協力があったからこそ、このような賞を受賞させて頂くことが出来たと思います。今学会は「臨床検査の広がり求めて～知・技・人をつなぐ～」というメインテーマであり、互いの知識や技術を惜しむことなく人へつないでいくという主旨に合った発表が出来たのではないかと思います。

今後はこの賞に恥じない臨床検査技師に成長すべく自己研鑽に励んで参ります。

最後になりましたが、本学会を開催するに当たり、ご尽力いただいた国臨協関信支部役員及び関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

学会特別賞を受賞して



国立国際医療研究センター病院
大 城 雄 介

この度、第43回国臨協関信支部学会におきまして、学会特別賞をいただき大変光栄に思っております。当院血液検査室では4名のスタッフで一日当たり血算900件もの検体量に対応しており

ます。限られた人数でいかに効率的に正確な結果報告ができるかに日々検討を重ね、検査室運営に取り組んできました。そのような中でISO 15189認定取得という大きなイベントを経験し、形態学的検査に対する教育訓練と標準化という壁に突き当たりました。これを超えるためには、スタッフ全員のレベルの底上げが必要であり、特に血液検査の中で難しいとされる骨髓像のトレーニングについて検討しなければならないと考えたのが今回の発表のきっかけです。骨髓像検査は経験が必要であり、ベテラン技師でも判読が困難な症例は少なくありません。当検査室は全員が若手であり経験不足は否めませんが、自由な発想と高い学習意欲をエネルギーにして今までにない効率的なトレーニング方法を検討しました。多くの貴重な症例を経験できる当院の特色を最大限に活かしながら、全員でディスカッションを重ね共に学んでいくことで少しずつ形にしていきました。今回、賞をいただきました「骨髓像トレーニング理論の提唱」はその結果であり、この演題が受賞できたことは我々が実践してきた取り組みが認められたことと確信しております。また、他施設の技師を受け入れる体制を整えていきたいと考えており、責任の重大さも実感しております。

最後に多大なご指導とご協力をいただきました当院中央検査部門の皆様、国臨協関信支部学会の運営にご尽力されたスタッフの皆様にご心より感謝申し上げます。



ベスト口演賞を受賞して



NHO西埼玉中央病院
星 野 知 子

この度は第43回国臨協関信支部学会におきまして、今回より設立されたベスト口演賞を頂く事ができ、大変光栄に思います。

今回発表させて頂いた演題は「O157集団発生時におけるXM-EHEC寒天培地併用の効果について」です。腸管出血性大腸菌（以下EHEC）はベロ毒素を産生し、溶血性尿毒症症候群など重篤な合併症を引き起こす場合もあるため、迅速な対応が求められます。今回の検討結果より、SIB寒天培地で透明集落、XM-EHEC寒天培地で紫色集落が発育してきた場合、O157の可能性のあることをより迅速に報告できると考えられました。O157の菌量が少なく、他の腸内細菌が多く発育してきた場合には、SIB寒天培地で透明集落の鑑別が困難な場合があります。XM-EHEC寒天培地ではEHEC以外の菌の発育が抑制され、紫色集落の形成を観察できたことから、O157と鑑別することができました。このことから、SIB寒天培地とXM-EHEC寒天培地の併用が迅速な報告を行う上で効果的であると考えられました。今後O26やO111についても併用の効果を検討したいと思っています。

この度の受賞は、とてもひとりで成せるものではありませんでした。初めての学会発表で分からないことばかりの私に、抄録やスライドの作成を指導して下さいました主任、遅くまで発表の練習を指導して下さいました佐藤技師長をはじめ、研究検査科の皆様のご協力あったことだと思います。心より感謝申し上げます。今後も頂いた賞を励みに技術研鑽に努めてまいりたいと思います。

最後に学会の開催にご尽力下さいました国臨協関信支部役員の皆様、会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

新人セッションベスト口演賞を受賞して



NHO東京医療センター
山 口 若 奈

この度は、第43回国臨協関信支部学会におきまして、新人セッションベスト口演賞を受賞し大変嬉しく思っております。

発表させていただいた演題は、「当院におけるSMBG（自己血糖測定）個別指導業務取り組み状況」です。当院では、SMBG個別指導業務が薬剤部から臨床検査科に移行したため、業務移行に伴う準備や現在の取り組み状況、直面している課題について報告しました。

今学会より、技師経験5年以下を対象とした新人セッションベスト口演の枠が新たに設けられました。今回、学会発表が初めてだったため、学会前の準備段階から大変緊張していましたが、新人セッションでの発表ということで、挑戦する気持ちで臨むことができました。学会発表に向けて準備する中で、いくつもの壁にぶつかりました。テーマはすぐ決まりましたが、抄録作成では伝えたいことを表現することの難しさ、見やすいスライドと分かりやすい原稿の作成など、ひとつひとつにつまずき、挫けそうになりながら作成したことは良い経験となりました。また、自施設では新人セッションベスト口演賞を同時受賞したスタッフもいたため、達成感を共有することができました。これからもお互いに切磋琢磨し、技師として大きく成長していきたいと思っています。

発表する機会を与えて頂きこのような賞を受賞できたのは、主任をはじめ先輩技師の方々や、多くの方のご指導のおかげであり、心より感謝しています。これからも今回の賞を励みに向上心を持って高い技術・知識を習得して、日々の業務に取り組んでいきたいと思っています。

最後に、今学会を開催するに当たり、ご尽力くださいました国臨協関信支部役員および関係者の方々に厚く御礼申し上げます。



新人セッションベスト口演賞 受賞者

演題番号	演 題 名	施 設 名	発 表 者
8	皮膚組織還流圧検査が切断部位の判定に有用であった下肢壊疽の2症例	NHO 東京医療センター	岡 部 里 子
11	当院における SMBG 個別指導業務取り組み状況	NHO 東京医療センター	山 口 若 奈

ベスト口演賞 受賞者一覧

演題番号	演 題 名	施 設 名	発 表 者
1	前骨間神経運動神経伝導検査の定量的評価法の確立	国立国際医療研究センター病院	川 口 港
13	当院における輸血後感染症検査の実施状況について	NHO東京医療センター	伊 藤 慧
15	骨髄像トレーニング理論の提唱	国立国際医療研究センター病院	大 城 雄 介
20	O157 集団発生時における XM-EHEC 寒天培地併用の効果について	NHO西埼玉中央病院	星 野 知 子
26	当院生理検査室における医療安全の取り組み	NHO西埼玉中央病院	高 橋 美 波
30	乳腺間質肉腫の1例	NHO埼玉病院	甲 斐 明 子
35	小児横紋筋肉腫における NOS1 抗体の有用性	国立成育医療研究センター	高 橋 千 明

支部表彰を受賞して



国立成育医療研究センター 和田 弘 夫

第43回国臨協関信支部学会において支部表彰をいただき有難うございました。推薦して頂いた方々並びに関信支部役員の皆様にご心よりお礼申し上げます。

昭和54年2月に国立東京第二病院（現 東京医療センター）に採用され、東京都内5施設で勤務し数多くの方々にご指導を賜りました。その中で特に思い出深い事としては統廃合による開院準備・サリン・カレー事件等での薬毒物検出用に向けた対応、また、災害訓練も経験いたしました。職場環境では現在

週休2日があたりまえですが、4週6休の導入、今では絶対に許されない検査室内での喫煙は古き良き時代の思い出となっています。また、支部役員も経験し、ホームページの作成や今では当たり前になっている支部学会でのパワーポイントでの発表導入など、楽しいことも辛いこともありましたが、皆様のおかげで務めることができました。

最後に関信支部役員、会員の皆様のご活躍と発展を祈念してお礼の言葉とさせていただきます。



NHO西新潟中央病院 土屋 邦 子

この度、第43回国臨協関信支部学会において支部表彰を頂きありがとうございます。推薦して頂いた新潟地区会ならびに関信支部役員の皆様にお礼を申し上げます。

私は昭和54年12月に西新潟病院（現 西新潟中央病院）に採用され、気付けば36年の年月が経っていたというのが実情です。検査技師として難無く当然の帰結ですが、喜びと誇りを感じる一方、このように表彰して頂けるに値するだけの功績を残してきたのか自問致しますと内心忸怩たるものがあります。ただこの36年を顧みますと、今日まで続けてこれたのも多くの上司と同僚に恵まれ、ご指導、ご助言等を頂いたお陰と感謝しております。この間に私達を取り巻く環境は大きく変化しましたが、当院はて

んかんに関する高度専門医療の実施、臨床研究、教育研修などの機能を備えた基幹施設として1996年度から毎年てんかんに関する臨床検査技師研修会を開催しています。今年度で20回目を迎へ、国立病院機構・国立病院、近隣の大学病院、県立病院等から延べ259名の方から参加を頂きました。この研修会に微力ながら携わることができたことは私にとって大きな糧となり、また思い出深いものがあります。そして、この研修会がきっかけとなり、脳波検査やてんかん診療に興味をもってくれる人が増えることを期待しています。

最後にご指導頂いた関信支部役員ならびに会員の皆様に心から感謝申し上げると共に国臨協関信支部の益々の発展を祈念してお礼の言葉とさせていただきます。



NHOさいがた医療センター 岩間 裕 子

この度、国臨協関信支部表彰を頂きましてありがとうございます。来春平成28年3月で約39年間の勤務を務め上げさせていただきます。昭和52年4月から国立新潟療養所（現 国立病院機構新潟病院）に採用になり、結核症、筋ジストロフィー症、重度心身障害者、超未熟児や小児慢性疾患を、平成19年4月からのさいがた医療センターではパーキンソン病はじめ神経難病や精神疾患と、一般病院では関わりを持つことのない国立病院の医療を学ばせて頂き、微力な

がら誠実に確実に業務に専念してまいりました。その中で結婚、出産、育児、介護や二度の震災と隣家の火事を経験し、検査科スタッフに支えられ人間的にも大きく成長させて頂き、感謝申し上げます。今まで支えていただいた方々への恩返しと考えております。

支部表彰を受けるにあたり、推薦の労をお取り頂きました技師長、地区会長はじめ関信支部役員の皆様にお礼申し上げます。最後になりましたが、今後の国臨協関信支部のますますの発展を心よりお祈り申し上げます。



NHO信州上田医療センター 高橋 康 之

このたび国臨協関信支部表彰を頂き、ありがとうございます。会員の皆様にお礼申し上げます。また、所用により当日欠席いたしましたことをお詫言いたします。

さて、国立病院から国立病院機構と30数年間勤務してまいりましたが、業績や貢献といった事とは無縁の、目先の業務に追われ続けた日々であったと反省しております。ただ技師長職に就いてからは、技師時代に不満や疑問に感じていたことを改善したつもりです。

その一つが検査機器整備について、単品購入から部門一括購入

で整備し、検査業務のパフォーマンスの向上を図ったことです。また、技師の研修会や学会参加・資格認定取得費用を、病院負担が相応であるとの理解を得たことです。

国立病院機構を去る者として懸念していることは、TPPについてです。農業問題ばかりが目されていますが、医療保険制度の開放が本丸であると思われます。具体的には、混合診療や薬価、企業による病院経営等々、厳しい状況が予想されます。組織改革・制度改革、そして意識改革が迫られることになるでしょうが、しぶとく生き残って日本の医療を守って頂きたいと思います。

最後に、このような未熟者と仕事をともにして頂いた、すべてのスタッフへ感謝を申し上げます。



JCHO東京山手メディカルセンター 水島 美津子

第43回国臨協関信支部学会において、支部表彰を頂き有難うございました。推薦して頂いた新潟地区会ならびに関信支部役員の皆様へ、お礼申し上げます。

昭和52年に犀潟療養所（現 さいがた医療センター）賃金職員採用で検査科配属ではなく、新潟大学脳研究所神経薬理教室の研究助手として、基礎からの研究分野業務に従事させていただきました。短期間ではありましたが、この時の経験は今の私にとっては、大きく役立っていると思っています。本来おっとり型の性格ですが、ご指導いただいた上司や先生、そして優秀な後輩などに

刺激を受け、いつしか専門学会での講師依頼や発表が多くなり、技師としても充実した時代を過ごせました。

私にとっての転機は、副技師長として異動した時です。着任した施設で自分に何が出来るか模索しているとき、大事なものは自己の実力ではなく、各自の能力が協調して発揮できる環境作りと、能力を引き出す指導力ではないかと考えるようになりました。異動5施設目の現在はJCHO組織の中で、皆様に助けられながら奮闘しています。NHOを離れた今、私には国臨協関信支部の多くの仲間がいるという安心感と誇りが、私を支えています。

最後に関信支部役員及び会員の皆様のご活躍を祈念し、お礼の言葉とさせていただきます。

生理検査部門分科会（超音波）に参加して



NHO高崎総合医療センター
藤 本 敬 久

平成27年9月12日（土）国立国際医療研究センター研究所会議室A・Bにおいて、第43回国臨協関信支部学会、ルーチンアドバイザーによる部門分科会が開催されました。生理検査部門分科会においては「超音波検査ハンズオン」と題し、循環器領域、腹部領域の2領域についてライブデモが行われました。

循環器領域は国立がん研究センター中央病院の中谷穂先生、腹部領域は「臍」について国立がん研究センター中央病院の宮越基先生、「腎・膀胱・前立腺」について国立国際医療研究センター国府台病院の山口秀樹先生がそれぞれ担当されました。

循環器領域では、心エコーの基本断面や計測について、コツや注意点を交えながら分かりやすく教えていただきました。スペクトルトラッキング法を用いた左室の容積計測や、左室壁運動のブルズアイ表示は装置上で短時間に分析

可能であり、日常検査に取り入れていきたいと感じました。腹部領域の臍では、昨年の部門分科会で紹介された臍の描出方法を実際にライブデモで学ぶことができました。臍は全体を描出することが難しいと考えがちですが、飲水法や右半側臥位、半座位などを利用することで尾部まで美しく描出されるのを目の当たりにし、正しい描出技術の重要性を再確認することができました。

腎・膀胱・前立腺では、プローブ固定のコツから、腎を描出する際に体側面から描出するのと背面から描出するのでは大きさが異なること、腎の左右の大きさ比較にはDual表示を利用すると視覚的に判断しやすいことなど、なるほどと感じる描出のポイントを学ぶことができました。一線で活躍される先生方のお話から、経験に裏打ちされた確かな技術を学ぶことができ、有意義で実り多き分科会であったと感じました。

最後になりましたが、ご多忙の中、部門分科会を企画・開催して下さったルーチンアドバイザー委員の先生方、関信支部役員の皆様に、深く御礼申し上げます。



検体検査部門分科会（緊急検査）に参加して



NHO災害医療センター
中 山 諒 太

平成27年9月12日（土）、第43回国臨協関信支部学会が国立国際医療研究センターにて開催され、検体検査部門（緊急検査）の分科会に参加させていただきました。各分野のルーチンアドバイザーの方々に、検査結果の解釈や、緊急時の対応等について、分かりやすく丁寧に説明をしていただき、大変有意義で貴重な分科会でした。

私は災害医療センターで働くことになってから今まで3年間、生化学・免疫検査部門を担当しています。それゆえ、生化学や免疫検査の分野であれば、臨床サイドから検査値について質問等があった際に、ある程度の説明や返答をすることができ、多少のトラブルがあったとしても、慌てずに対応できるようになってきていると個人的に思っていま

す。しかし日当直時には当然、自分が普段担当していない分野でも対応しなければならないため、3年目となった今でも恥ずかしながら多少の不安を抱えたまま日当直業務を行っていました。今回の講演を聴講させていただき、普段担当していない分野に対して、自分に足りない部分の認識や、検査や測定データの対処方法等を学ぶ、良いきっかけとなったことを大変嬉しく思います。またルーチンで担当している分野についても、普段の業務に活かせる知識を教えていただくことができたので、とても感謝しております。

今後ルーチンアドバイザーの方々にはこのような機会を設けていただけると、私達新人技師にとって大変参考になりますので、分科会の継続的な開催をお願いいたします。

最後になりましたが、お忙しい中今回の分科会を企画、運営して下さいました国臨協関信支部役員の皆様、ならびにルーチンアドバイザーの皆様に感謝と御礼申し上げます。





第2回関信支部主催・茨城地区会共催研修会報告

臨床検査技師と院内感染防止対策の深い関係

日立製作所日立総合病院 検査技術科
赤 津 義 文

初めに、韓国で流行しているMERSの話題に触れ、医療従事者が最新の知識を持って対応することの重要性を取り上げた。韓国では患者が受診した病院で、また次の感染が発生するという院内感染の状況が起きている。また、2003年に中国や香港で大流行したSARSの際も病院が新たな感染の場となって拡大した。外来においても、感染症予防の徹底と患者配置がポイントとなると考えられる。

一般細菌の感染としては、多剤耐性菌の院内感染が問題となる。臨床検査技師は、早い段階から情報を把握・発信し、多くのスタッフがその情報を共有することが必要である。例えば、日立総合病院ではグラム陰性桿菌のMDRPやMDRAについては、3剤耐性の条件に合わなくても2剤耐性菌の段階で多剤耐性予備群として、危険な菌としてチェックしている。MRSAについては、同一菌の拡がりなのかどうか確認する手段として、薬剤感受性検査結果のパターンの記録と整理を行っている。同一病棟で同一感受性パターンを示すMRSAが検出されれば、水平感染として徹底的に原因を追究する。アウトブレイクになる前に対応する必要がある。

感染対策委員会やICTのメンバーには微生物検査担当の臨床検査技師が入って活躍していると思うが、その具体的な役割として、下記の5項目を挙げた。

- ①疫学統計を含めたデータ提供（アンチバイオグラム、多剤耐性菌情報）
- ②サーベイランスやラウンド
- ③アウトブレイクになる前の早い段階での察知
- ④職員への教育・啓蒙（研修会等の企画）
- ⑤消毒や滅菌の評価・運用指導

この中で、医療機能評価や保健所立ち入り調査でも全職員への教育は重要項目として求められている。サーベイランスや教育は他の職種のスタッフが担当している施設もあると思うが、臨床検査技師が積極的に関わることも重要であると考えている。例えば、手指衛生の重要性を教育するために、「手はこんなに汚れている!」ということを示す場合は手指培養を行うことがあるが、言葉や文字だけで結果を示すのではなく、実際に細菌が発育した培地を見せながら教育した方が意識付けの効果がある。日立総合病院では、研修会（全職員、部門別）の企画・運営に臨床検査技師（ICMT）も関わっている。特に、分かりやすく

研修できるよう院内職員が出演する短編ドラマを制作し、趣向を凝らしている。今回の国臨協関信支部研修会では、インフルエンザをテーマにしたものと標準予防策をテーマにした短編ドラマを放映した。禁忌の行為を含んでおり、間違い探しをするように制作しているが、全体的に笑いが多く、全職種が楽しめるようにしている。間違いの点としては、“咳をしているのにマスクをしていない”“感染性廃棄物の正しい捨て方ができていない”“手袋をしなくて検体を採取している”などのシーンを挿入し、放映後に解説する。事務系の職員を含めてすべての人が感染症予防を理解する必要がある、全職員向け研修会でも意識付けが課題となる。受付の事務員は最初に患者と接するが、そこで咳をしている患者がいればマスクを着けさせることも必要である。

最後に、臨床検査技師は院内すべての微生物検出状況を把握しているので、その自覚を持って迅速に行動を起こすことが最も重要であることを伝えて発表を締めくくった。



地区会だより

第35回関信支部茨城地区会定期総会および第2回関信支部共催研修会を終えて



NHO水戸医療センター
古賀 菜摘

平成27年6月6日（土）にNHO霞ヶ浦医療センターにおいて、第35回国臨協関信支部茨城地区会定期総会および第2回国臨協関信支部共催研修会が開催されました。地区会総会には32名の会員参加があり、来賓として関信支部より峰岸支部長と小沼事務局長のご出席を賜りました。定期総会では始めに永井会長の挨拶と峰岸支部長の関信支部活動内容が紹介されました。その後議案審議、新役員および委員選出が滞りなく行われ35回の永く歴史ある定期総会を終了しました。

総会後、ホテルグリーンコア土浦へ会場を移し合同研修会が開催されました。研修会は「臨床検査技師と院内感染防止対策の深い関係」というテーマで、日立製作所日立総合病院 赤津義文先生、NHO東京医療センター 樋口晶子主任技師、NHO水戸医療センター 山田浩司主任技師、NHO茨城東病院 小林昌弘技師の4名に御講演頂きました。講演では先生方の院内での活動経験をもとに、院内感染対策に関する教育周知活動への熱心な取り組みや、院内感染対策への検査技師としての関わり方、また実際に多剤耐性菌アウトブレイクを経験しての当時の経緯や具体的な対応、抗酸菌検査の検査法や検査意義などを分かりやすく説明していただき大変勉強になりました。最近韓国ではMERSの更なる感染拡大が懸念されており、病院が感染拡大の現場となっている中で改めて院内感染対策について考える貴重な機会を得る事が出来ました。迅速な対応をする為には、事前の知識の備えと日頃からの院内感染対策が重要であり、複雑な業務の中でどうすれば継続して実行出来るのかを考え、全員が徹底して感染対策を実行することが大切だということを改めて感じました。

研修会終了後、会場を移して懇親会が行われました。会員相互の親睦交流を深める貴重な機会となり、有意義で楽しい時間を過ごしました。

最後に御講演・御参加頂きました赤津義文先生、峰岸支部長、樋口主任、山田主任、小林技師、ならびに関信支部理事、地区会役員の皆様には心より御礼申し上げます。

平成27年度関信支部茨城地区会役員

会 長：児 玉 徳 志（NHO霞ヶ浦医療センター）
副 会 長：大 川 正 人（NHO水戸医療センター）
副 会 長：永 井 信 浩（NHO茨城東病院）
事務局長：松 本 善 信（NHO霞ヶ浦医療センター）
理 事：谷 岡 健 作（NHO水戸医療センター）
理 事：小 池 勝 人（NHO茨城東病院）
理 事：矢 崎 晴 識（NHO霞ヶ浦医療センター）



関信支部長野地区会定期総会・研修会を終えて



NHOまつもと医療センター 中信松本病院
竹ノ内 一 雅

平成27年6月27日（土）NHO信州上田医療センターにおいて、第30回長野地区会総会及び研修会が開催されました。

当日は梅雨に入り長雨の日が続く中、久しぶりに天候に恵まれた日でした。

先ず始めに「平成26年地区会会員が各学会で発表した演題発表」と題した研修会が開催されました。①免疫阻害法による新規CK-MB活性の検討 佐久間悠輔先生（信州上田医療センター）②デジタル脳波計を導入して 三井恵都子先生（信州上田医療センター）③非接触型静脈可視化装置Stat Veinの有有用性について 千賀宏先生（まつもと医療センター 中信松本病院）④超音波における小児の脾臓計測について 柳澤隆司先生（信州上田医療センター）⑤国立病院機構関連病院で経験した多剤耐性アシネトバクターによるアウトブレイク～検査科の対応を中心に～ 矢野政敏先生（信州上田医療センター）の方々による発表がありました。各発表の後には活発な質疑応答があり、大変参考になったと共に、とても刺激を受けました。

続いて、地区会総会が行われました。来賓として国臨協関信支部 小沼事務局長ご臨席のもと、長野地区会会員26名の出席がありました。議長に中條副技師長（信州上田医療センター）、書記に千賀主任（中信松本病院）、藤田主任（小諸高原病院）が選出され、議事に入りました。円滑な進行で、議事審議等は

滞りなく行われ、無事に閉幕しました。

その後、懇親会が信州上田医療センター7階「レストラン グリーンヒル」で開かれました。長野県は各病院が山脈で隔たれており、各施設の会員同士がじっくりと会話することが困難ですが、この懇親会で様々な情報交換をすることができ、交流を深めることが出来ました。

最後になりましたが、ご参加いただきました小沼事務局長、発表して頂いた各先生方、ならびに長野地区会理事の方々、会場を提供して下さいました信州上田医療センターの皆様にはこの場をお借りし、心より深謝申し上げます。

平成27年度関信支部長野地区会役員

会 長：北沢 敏男（NHOまつもと医療センター松本病院）
副会長：瀬下 明子（NHO東長野病院）
理 事：千賀 宏（NHOまつもと医療センター 中信松本病院）
理 事：佐久間悠輔（NHO信州上田医療センター）
理 事：藤田 圭子（NHO小諸高原病院）



地区会だより

関信支部千葉地区会定期総会・研修会を終えて



NHO千葉東病院
石 川 政 志

平成27年7月4日（土）NHO千葉医療センターにおいて、平成27年度国臨協関信支部千葉地区会定期総会が開催されました。会員48名の参加に加え、来賓として関東信越グループの林専門職、国臨協関信支部から

峰岸支部長、岩崎副支部長にご臨席を賜りました。

はじめに、研修会として関東信越厚生局麻薬取締部課長補佐の阿部祐二先生に現在話題になっている「危険ドラッグの現状」についてご講演を頂きました。麻薬や覚せい剤と比較しても危険ドラッグの成分組成はでたらめであり、服用者にどのような反応が出るかは予想ができないなど、改めてその怖さを知りました。

続いて、林専門職から国立病院機構の現状報告や人事等についてのお話を頂きました。現在、人事交流は国立病院機構内だけにとどまらなくなっているため、どこにいても通用する検査の知識や技術の習得、さらにはコミュニケーション能力の向上にも努めていかなければならないと感じました。

次に峰岸支部長より挨拶と関信支部の概要、活動報告、今年度のスケジュールが伝達されました。

定期総会では吉川会長の挨拶に始まり、議長に選出された国立国際医療研究センター国府台病院の山口副臨床検査技師長の進行のもと、平成26年度経過報告と会計報告、平成27年度事業方針案と会計予算案などについて審議され、会員の承認をもって無事に終了いたしました。

総会終了後には千葉駅近くの居酒屋で懇親会が行われ、一次会、二次会ともに多くの会員が集まり、親睦を深めることができました。

最後になりますが、お忙しい中ご講演を頂いた阿部先生、林専門職、またご臨席頂いた峰岸支部長、岩崎副支部長、さらにこの会を企画・開催してくださいました千葉地区会役員の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成27年度関信支部千葉地区会役員

会 長：吉 川 英 一（国立がん研究センター東病院）
副会長：会 田 春 光（NHO下総精神医療センター）
理 事：齋 藤 広 樹（国立国際医療研究センター国府台病院）
理 事：齋 藤 友 永（NHO千葉東病院）
理 事：中 島 菜緒美（NHO下志津病院）
理 事：小 松 千 夏（NHO千葉医療センター）



平成26年度関信支部千葉地区会文化活動 ～防災体験ツアー～



NHO下志津病院
川 野 祐 一

平成27年5月23日（土）快晴の中、国臨協関信支部千葉地区会・文化活動及び懇親会が行われました。

私は、この4月に村山医療センターから下志津病院に異動となり、千葉県は当施設を含め4施設となるため、とても懐かしい思いで参加いたしました。

今年度は例年と趣向を変え、松戸市にある千葉県西部防災センターでの防災体験ツアー企画です。この体験ツアーは最初に千葉県にも大きな被害をもたらした東日本大震災の被害や教訓が紹介され、改めて震災の恐ろしさや悲惨さを再認識させられました。風速30m/秒、雨量30mmの暴風雨を実際に体験、また火災建物内の煙の中での避難体験、消火器を使った消火体験、訓練用人体模型を使用した心肺蘇生法やAED使用法を体験的に学ぶ事ができました。特に印象的だったのは、実際の阪神淡路大震災、東日本大震災と同様の状況を再現できる起震装置を使用した地震体験でした。当然立っていることはできず、机の下で踏ん張ってはみるものの転がってしまう人、机に頭をぶつけてしまう人など、それは想像を絶するものすごい揺れで、再びこんな地震が起きたら「どうになってしまうのだろうか」と考えさせられました。また、関東地方では今後30年間にM7以上の地震の起きる可能性が70%以上あると予想され、震災に備えて備蓄品や非常持ち出し品等、準備しなければと改めて考えさせられました。

約2時間の体験ツアーのあと場所を、市川駅近くの居酒屋へ45名の大移動。懇親会からの参加者10名が加わり総勢55名の大

宴会が行われました。

この懇親会は歓迎会を兼ねていて、転入者の自己紹介があったが、新採用者を除くとほとんどの人が千葉地区会を経験しており、皆が「千葉地区会は仲が良い。団結力がある。地区会活動が楽しい。また戻れてうれしい。」など異口同音に自己紹介がされました。大変和やかに時間が過ぎていき、楽しい仲間や後輩、優しい先輩方と楽しい一時を過ごすことができました。最後に、この会を企画してくださいました、吉川会長はじめ理事の皆様へ深く感謝申し上げます。



地区会だより

関信支部東京地区会文化交流会に参加して



NHO災害医療センター
小此木 莉奈

平成27年5月30日（土）、5施設で構成されている関信支部東京地区会の文化交流会が池袋で開催され、47名の参加がありました。今回の文化交流会はボーリング大会と懇親会の2部構成で、1部のボーリング大会は他施設の方々と混合でチームが作られました。私は思うようにスコアを伸ばすことが出来ませんでしたが、先輩方は「久しぶりのボーリングなんだよね・・・」などと話されていたにも関わらず、ゲームが始まると目が輝き始め、あちこちでストライクやスペアとともに大きな歓声とガッツポーズやハイタッチをする光景が見られ、どのレーンも大変に盛り上がっていました。高スコアをたたき出す先輩方のプレイにはとても興奮し、日常の仕事とは違う一面を見る事が出来ました。第2部は会場を変えて、まずは、個人別、施設別のボーリング大会の結果が発表されました。当院は何と施設別で第1位を取ることができ、チームワークの凄さを感じたとともに素

晴らしい賞品をいただき大変盛り上がりしました。続いて石井技師長のご発声で乾杯があり、待ちに待った懇親会が始まりました。汗を流したボーリング後のビールは格別で、まさに至福の瞬間です。若い人たちが飲むだけではなく、年上の先輩方から仕事の話や普段は聞く事の出来ないプライベートな話も沢山聞かせていただき、大変勉強になりました。今回の文化交流会は初めて参加した私にとって、他施設の方々と垣根を越えた充実したものでした。

最後になりましたが、今回の文化交流会の企画・運営をしていただきました内野会長をはじめ役員の皆様に心より感謝申し上げます。



第3回関信支部主催研修会を聴講して



NHO東京医療センター
阿久津 朋子

平成27年7月11日（土）、国立国際医療研究センターにおいて第3回国際協関信支部主催研修会が開催されました。講師にリスクマネジメント・危機管理講師、元日本航空機長の小林宏之先生をお迎えし「安全・安心確保のためのリスクマネジメント」と題して御講演頂きました。

講演を聴くことにより、漠然と認識していたリスクマネジメントについて、より具体的に理解を深めることができました。職場におけるリスクマネジメントの目的は安全・安心の確保であり、その基礎は健康管理の考え方と同じで未然防止（予防）、被害局限対応（治療）、回復、再発防止となります。未然防止の要諦として愚直なまでに基本・確認の徹底を、繰り返しキーポイントとしてお話し下さいました。職場で実践するためには、上

司・先輩が基本・確認を徹底し、当たり前のことや特別目立たなくても基本・確認行為を徹底している部下・後輩を意識し、褒めて評価する必要がある、これにより危機発生確率が少なくなる風土を構築することができる、とのことでした。加えて、テクニカルスキルとノンテクニカルスキルの重要性やコミュニケーション、今求められる役割遂行型リーダーシップなど解りやすく説明して頂きました。

新人、中堅、ベテランそれぞれの立場で業務に対する視点は変わりますが、どのような立場の方でも意識するポイントが多かったのではないのでしょうか。日常業務においては、当たり前なこと程意識する気持ちをもって確認、実施する事を心がけたいと思います。

最後になりますが、ご多忙中に御講演頂きました小林先生、並びにこの研修会を企画・運営して下さいました国臨協関信支部役員の皆様に心より御礼申し上げます。



平成27年度国臨協関信支部ビアパーティーに参加して



NHO埼玉病院
渡 部 利 佳

平成27年7月11日（土）国臨協関信支部主催のビアパーティーが新宿の創作和食Dining 御楽にて開催されました。当日は梅雨の晴れ間にあたり絶好のビール日和となり、

150人を超える会員の皆様に参加していました。あまりの参加者の多さにビックリ、そして会場が間仕切りタイプの居酒屋だったこともあり、多ブースに分かれて貸切パーティーと何もかも私にとって初経験の事ばかりでした。まず、挨拶や乾杯が拡声器を用いて行われ、また飲み物はお酒もソフトドリンクも全てピッチャー飲みきりでオーダー出来る方式だったため、周りの席の方々とメニューを見ながら楽しく相談してオーダーしていたので、いつになく二日酔い一歩手前まで飲ませて頂きました。

初めてビアパーティーに参加させていただいたので、少し不安な気持ちで会場に向かいました。しかし、お世話になった諸先輩方や友人に再会できたり、新人研修会で知り合った同期と久しぶりに交流できたり、徐々に緊張がほぐれていきました。

会が進むにつれて席の移動が始まりノミネーションが深まり始めると、私も先輩に背中を押されテーブルを移動し、たくさんの先輩方にご挨拶・お話をさせていただきました。初対面でも気さくに話しかけてくださる方が非常に多く、国臨協の皆様の温かさを感じると共に人事交流の素晴らしさを知ることができました。何より先輩方の経験談や様々な考え方を学べた良い機会だったと思います。気付けばあっという間に2時間が経ち、とても有意義な時間を過ごせました。

最後になりましたが、このような会を企画していただきました関信支部役員の皆様には深く感謝申し上げます。来年も是非参加したいと思っております、有難うございました。



人 事 異 動

【平成27年6月5日付 退職】

氏 名	旧施設名	旧職名
石 川 淳	国立療養所多磨全生園	技 師 長

【平成27年7月7日付 退職】

氏 名	旧施設名	旧職名
三 宅 隆 徳	水戸医療センター	技 師

【平成27年7月14日付 退職】

氏 名	旧施設名	旧職名
中 山 敬 太	東 京 病 院	非 常 勤

【平成27年8月16日付 退職】

氏 名	旧施設名	旧職名
野 田 岳	高崎総合医療センター	技 師 長

【平成27年8月31日付 退職】

氏 名	旧施設名	旧職名
岡 林 舞	国立成育医療研究センター	技 師

【平成27年10月1日付 昇任】

氏 名	新施設名	新職名	旧施設名	旧職名
久 高 果 市	国立療養所多磨全生園	技師長	東 京 病 院	副技師長
山 田 晶	東 埼 玉 病 院	副技師長	千葉医療センター	主任技師

【平成27年10月1日付 配置換え】

氏 名	新施設名	新職名	旧施設名	旧職名
此 崎 寿 美	東 京 病 院	副技師長	東 埼 玉 病 院	副技師長

【平成27年10月1日付 採用】

氏 名	新施設名	新職名	旧施設名	旧職名
磯 田 将 太 郎	水戸医療センター	技 師	国立成育医療研究センター	非常勤
渡 辺 晃 司	千葉医療センター	技 師	国立がん研究センター東病院	非常勤

国臨協関信支部今後の予定

月	日	曜 日	支 部	地 区 会
11月	7日	土曜日		栃木地区会定期総会
	8日	日曜日	第4回研修会(病理・細胞診)	
	14日	土曜日		神奈川地区会定期総会

訃 報

かねてより病氣療養中のところ元国立療養所多磨全生園 臨床検査技師長 石川 淳 様(59歳)におかれましては6月5日に永眠されました。

ならびに元NHO高崎総合医療センター 臨床検査技師長 野田 岳 様(54歳)におかれましては8月16日に永眠されました。

謹んでお二方の生前のご厚情に感謝するとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。

編 集 後 記

第43回国臨協関信支部学会に多数の参加を頂きましてありがとうございました。今年から新人セッションやベスト口演賞など新たな試みも行いましたが、皆様はどう感じられたでしょうか？

さて、“スポーツの秋”体を動かすには快適な季節になってきました。汗をかかないまでも近所を散歩するだけで、心地よい気分になれるのではないのでしょうか。新たな発見や思いがけない出来事に巡り合えるかもしれませんよ。

(広報部 椎名将昭)

覚えよう

身につけよう

検査技術!

凍結標本作製について

NHO東埼玉病院 臨床検査科 山 田 晶

はじめに

通常病理組織診断は、検体採取後に固定や切り出し等を経て、標本提出までに1日から長くても1週間以上を要する検体もある。しかし、手術中などすぐに診断結果が必要な場合もある。病変部の良悪の判定、切除断端部への腫瘍の有無、リンパ節転移の有無などを判断し、速やかに診断しなくてはならない。今回、クリオスタット(図1)を用いた迅速時における凍結標本作製の注意点を概説する。

凍結標本は、ホルマリン等で固定をしていない生の組織を用いて作製する。基本的な凍結標本作製の流れは、目的とする病変部を切り出し包埋剤に埋没した後、冷媒に入れ速やかに凍結する。凍結したブロックをクリオスタットで薄切スライドガラスに切片を貼付する。切片を固定してH.E染色を施し標本として提出する。これらの工程を如何に速やかに行い、質の高い標本作製するかが重要である。

切り出しの注意点として、永久標本同様に切り出し組織の大きさと包埋皿の大きさを合わせる。包埋皿は、プラスチック製皿より金属製皿(テフロン加工されているとより良い)を使用する方が望ましい。熱伝導性が高く急速に凍結することが出来る(図2)。



図2. ①プラスチック製皿 ②金属製皿 ③テフロン加工した金属製皿

切り出す標本は、時に生理食塩水に浸したガーゼに包まれて提出される。生理食塩水や血液が付着していた時は、組織が傷つかぬよう注意しながら余分な水分を取り除く。これは、細胞外の水分凍結による氷の結晶生成を防ぐためである(図3)。凍結点である0℃から-7℃までの温度範囲を最大氷結晶生成帯といい、この最大氷結晶生成帯を速やかに通過させることにより氷の結晶生成を最小限に抑えることが可能である。冷媒は、液体窒素、アセトン、イソペンタン、ヘキサンなど様々な冷媒がある。液体窒素は最も温度が低く、急速凍結が可能であるが、管理面に課題がある。通常は、アセトン、イソペンタン、ヘキサンにドライアイスを加えた液体を用いる事が多い(表1)。

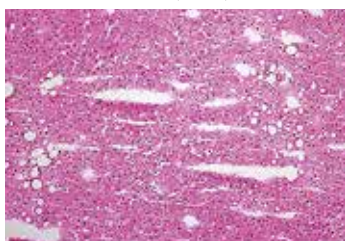


図3. 最大氷結晶生成帯が長く氷晶によるアーチファクト

冷 媒 等	温度(℃)	冷 媒 等	温度(℃)
液体窒素	-196	ドライアイス・アセトン	-78.5
ドライアイス・イソペンタン	-78.5	ドライアイス・ヘキサン	-78.5
ドライアイス・エタノール	-78.5	液化炭酸ガス	-78.5
液化プロパン	-188	冷却スプレー	-30
クリオスタット冷却板	-40		

表1. 主に使用されている冷媒



図4. ①ステンレス製容器②保温型弁当箱③凍結ブロック作製装置

また、冷媒を入れる容器も様々である(図4)。ステンレス製容器①と保温型弁当箱②は安価で簡便に使用できる。両容器とも冷凍庫にて保管し使用時にドライアイスを入れ使用する。ステンレス製容器は、検体数が多いとすぐに冷媒が温まってしまうが、保温型弁当箱は保温性に優れ複数個のブロックを作製することが可能である。凍結ブロック作製装置③はドライアイスの準備が不要で、操作性に優れているが高価である。

薄切時はブロックの温度が重要である。実質臓器は-20℃前後、脂肪を多く含む臓器は-30℃以下が薄切に適している。過冷却すると、メスと平行にひび割れが生じスダレ様になる。凍結が緩いとメスに切片が付着しシワを生じる(図5)。



図5. ①過冷却②適温③冷却不足

脂肪を含む検体も工夫を要する。乳がんの断端やセンチネルリンパ節は脂肪に包まれたまま検査室に提出されることが多い。センチネルリンパ節は被膜を傷つけないよう可能な限り脂肪を取り除くことにより良い標本作製出来る(図6)。また乳腺の断端は、包埋剤に界面活性剤や家庭用洗剤を加えたものを使用すると薄切しやすい。



図6. ①は脂肪を付着したまま作製②は脂肪を取り除いて作製

余談だが、特に冬季に起こりやすい現象で切片をスライドガラスに貼り付けるときに、静電気で切片が浮き上がり上手く貼れない事がある。そんな時は指に軽く水を付けスライドガラスの裏面を軽くなぞると静電気を防ぐことが出来る。

固定液も各施設様々で、メタノール等のアルコール単独固定やホルマリンとアルコールの混合液、さらに酢酸やクロロホルムを加えた固定液もある。メタノール等の単独固定はクロマチン構造が不明瞭化すると報告もあるので注意したい。

まとめ

術中迅速病理診断時は短時間の間により良い標本作製することが重要である。凍結切片はパラフィン切片と比較して、クオリティが低くなりがちであるが、如何にパラフィン切片と同等の標本作製できるかを各個人が考えながら工夫することが肝要と考える。

参考文献

堤 寛, 平澤 浩: 新鮮凍結切片の作り方, 病理と臨床 2004, 5: 515-518
朝隈啓子, 福島範子, 多賀 正: 凍結切片作製法の一工夫, 1988 6: 1239-1240
特定非営利活動法人 病理技術研究会: 基礎病理学(初版)